うちの殿様何をした（亀山・福井・加賀）

増山雄三

新政府につくか、幕府に従うか、諸大名がその去就を決めた、幕末の事件は幾つかあるが、「鳥羽伏見の戦い」こそ、最大の分かれ目だったといっても、過言でないだろう。

この戦いで、「錦の御旗」が掲げられた事によって、新政府側は「官軍」といわれ、これに対する幕府側は「賊軍」で「朝敵」となる事も、決定してしまったのである。

この「錦の御旗」の威力は絶大で、現役の老中だった、稲葉正邦が藩主の淀藩ですら、淀城の城門を閉ざして、幕府軍の入場を拒んだほどである。

それは、この時代の人々にとって、朝廷の権威は絶対的なものであり、かつての後醍醐天皇が、鎌倉幕府打倒の際に使った、伝説の「錦の御旗」に刃向うには、よほどの勇気が

必要だったのである。

そのなかで、京都府にあった五万石の「亀山藩」は、前藩主の松平信義は、「安政の大獄」にも協力した佐幕派だったが、恭順の意を申しでても疑われ、砲撃されてしまったものの、再度の申し入れでやっと認められた。

信義は、大坂城代や老中、それに外国御用取扱などを歴任した人物だが、一八六六年二十五才で藩主になった信正も、幕末の政局のなか、藩是として佐幕派の立場をとり、翌年からは京都町奉行に代わって、京都市中取締の任にあたっていた。

鳥羽伏見の戦いの最中、官軍は敗戦の場合に備えて、天皇を連れて山陰道方面に逃れる事を計画し、西園寺公望を総督とした山陰道鎮撫使が派遣され、亀山藩領馬路村に入ったが、藩は藩論を纏めきれないまま、官軍に使者を出し、恭順を申し入れた。

しかし、亀山藩は幕閣の枢要を担った経緯から、官軍は強硬な態度に出て、城に砲撃を

加えてきたので、これに慌てた藩は、再び使者送って恭順の意を表し、ようやく帰順がＭ留められ、以後、官軍に加わった。

一八六九年、版籍奉還で松平信正は藩知事に任命され、同年、伊勢亀山藩との混同を避けるため、三万石の「亀岡藩」と改称され、一八八五年に、教化団体生徳社を設立した信正は、一九〇九年に五十八才で亡くなった。

次に、越前若狭の福井県では、「福井藩」が三十二万石と最も大きく、あとは中小規模の大名が名を連ねていたが、幕末維新の殿様の中で、「この人なかりせば」という人を、一人挙げるとするならば、それは、福井藩主の「松平春獄」その人だろう。

その福井藩の藩校である明新館の、米国人牧師のグリフィスは、廃藩置県の様子を回顧し、その時、福井城の大広間に藩士たちが集められ、「遥か永遠に思いを馳せながら、封建制度の厳粛な埋葬」に立ち会ったという。

その翌日、最後の藩主だった松平茂昭が東

京に旅立つ時には、近在から幾千者民衆が押し寄せ、人々のすすり泣きはやがて号泣になり、お殿様の時代の、美しくも切ない幕切れとなった、と彼は語っている。

松平茂昭の先代藩主だった、三十二万石福井藩第十四代藩主の松平春獄（慶永）は、幕末の「**四賢侯**」の一人に数えられ、赤字に苦しむ藩政改革に取組み、橋本左内ら有能な士を登用し、倹約令、軍制改革、教育振興のため、藩校の明新館の設立を進めた。

また、将軍継承問題や条約勅許問題では、水戸斉昭らとともに、大老の井伊直弼と対立したが、井伊の反撃にあい、春獄は隠居謹慎させられ、右腕の橋本左内も安政の大獄で失い、養子の茂昭が最後の藩主になった。

それでも、一八六二年に謹慎処分が解かれて、政事総裁職として政界に復帰し、洋式軍制の採用や参勤交代の緩和を行ない、二百三十年ぶりの将軍上洛など、幕政改革に奔走する一方では、公武合体を進め、二院政議会制

の構想を主張した。

それでも、さすがの春獄も、倒幕の流れは止められず、大政奉還した慶喜を朝議に参加させる試みも、戊辰戦争の勃発で頓挫し、藩兵を北越と会津戦争に送り、多くの戦死者を出したが、賞典禄一万石を得た。

その後、新政府に参加した春獄だが、徳川宗家の存続運動に尽力し、一八七五年には公職を退くが、帝国憲法への私見を著すなど、「賢侯」ぶりを発揮し続け、一八九〇年、東京小石川で、享年六十三才で没した。

そして、石川県といえば、「加賀藩」が前田利家の加賀百万石で有名だが、織田信長の家臣として立身出生した利家だが、秀吉時代にもうまく立ち回り、強大な版図を築いた。

しかし、江戸時代に入ると、前田家は武よりも文に重きを置く藩風を作り、幕府との摩擦をひたすら避ける一方で、学問と絢爛たる文化を栄えさせ、九谷焼や加賀金箔を生んだには、その粋の代表である。

ところが明治になって、新政府の県令が赴任してくると、金沢の奢侈な雰囲気は好ましくないという事で、県庁が金沢から郊外の石川郡美田という所に移された事で、それが、金沢県から石川県になった所以である。

その百二万石加賀藩の、第十三代藩主だった「前田慶寧」は、世子時代から尊王攘夷思想に傾注し、側近も勤王派で固めていたが、「禁門の変」の時、御所を守るため京にいた慶寧は、長州との戦闘が避けられないとみるや、長州との交戦を嫌って撤兵し、そのあと帰国してしまった。

このような、敵前逃亡に等しい慶寧の行動は、幕府は激怒したので、波紋を恐れた藩主の斉泰は、慶寧を謹慎させ、勤王派の側近は切腹や流刑にし、これによって、加賀藩の勤王派は全て壊滅してしまった。

一八六六年、慶寧は家督を継いで藩主となるが、藩内に勤王派はなく、慶寧は羽根をもがれた烏同然だったが、穏健な佐幕派として

幕末を迎え、鳥羽伏見の戦いでは、幕府の命で出兵するが、京に向かう途中で、幕府軍敗北の報に接し、進軍を止め官軍に恭順した。

恭順後、慶寧は積極的に勘隅に協力し、北越戦争や会津戦争では、その主力となって活躍したので、戦後、その武功が認められ、一八六八年、金沢県知事に任命されるが、廃藩置県で侯爵叙せられ、東京に居を移して暮らしたが、享年四十五才で亡くなった。

ところで、慶寧を生んだ溶姫（やすひめ）は、第十三代将軍家斉の娘だったため、幕末維新の動乱に翻弄され、加賀藩が官軍に恭順した際、新政府に味方した以上、将軍家との関係はマイナスである。

そこで慶寧は朝廷へ嘆願し、溶姫は金沢へ帰国する事になったが、越中泊の駅で、「これ以上加賀藩領内に入る事はまかりならん」と追い返され、泣く泣く引き返したが、将軍の娘ゆえの、苦衷を味わされたという。

令和三年七月